

小論文「私の目指す看護師像」の指導

—「体験」から「自己像の確立」へ—

呉大学看護学部

深 川 賢 郎

論文要旨 この授業は小論文の学習活動を通じて、看護師としての自覚を高め、自己像の確立をはかることを目指す。授業改善の視点（授業仮説）として、①体験を振り返る、②職業理解を深める、③論文の書き方を学ぶ、④添削指導とそれをもとにした全体指導を実施する、ことを設定した。授業の成果と課題について、①学生の自己評価、②学生によるテキストの評価、③学生による授業評価、を実施した。特に、学生の授業における自己評価に見られる「自己変革」「自己発見」について考察し、小論文の授業を通じて意欲的・主体的に取り組む看護師像の形成のあり方を考える。

キーワード：看護師像、体験、自己理解、職業観、生きる力

■ はじめに

看護学部の4年次生を対象とする小論文の授業が、今年で5年目を迎えた。当初は、小論文としての「書き方の学習」が中心であった。しかし、授業を積み重ねるにつれて、看護師としての職業観や仕事における「生きがい」を見据える方向に学習の比重が移っていった。看護師を目指す人にとって、看護職に関する職業理解や基本的な態度の確立は最も重要な事柄である。加えて、なぜ、自分が看護師になろうとしているのかという志望の動機や目指す目標をあらためて顧みることは、仕事に生きがいを感じ、自らの仕事を受け入れるための重要なプロセスといえるであろう¹⁾。

看護職には、その性質上、高い理念と強い克己心が求められる。仕事に対する情熱、患者を思う心、奉仕の精神や献身の態度がきわめて重要である。それを支えるのは、自らの実体験から生み出された人生観や職業に対する使命感などであろう。そのためには、自分がこれまで看護に関して得た知見と深い思索によって、看護師としての自己像の確立がなされなければならない。

本稿は授業研究として吟味するには、時間数も限られており、準備や授業結果の分析も不十分である。しかし、学生は熱心に取り組み、その反応も予想を超えていた。そのため、授業の構成についてまとめ、学生の自己評価を考察し、授業のあり方を考えた。

■ 授業の構成

- 1 科目名：「職業選択と看護師のアイデンティティー」
- 2 対象学年：4年次生全員・自由選択科目。病院の臨地実習、研究活動などの事情により、やむをえない欠席もあった。最後まで受講できた学生は92名。
- 3 授業時間：「職業選択と看護師のアイデンティティー」は90分授業7回のうち、50分のオリエンテーションと4回が小論文の授業となる。他の3回は別の講師により、職業理解についての講義と就職活動に向けての実務指導の時間となる。小論文では、受講者を二クラスに分けて実施した。
- 4 作文指導観（授業仮説）：授業の主な目的は、

ふかがわ けんろう

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

「看護師としての自己認識の確立」である。「書くこと」は、他ならない「私」が考えることを作文によって表現することである。「私の体験」によって生まれる「私の価値観」、「私だけが抱く職業観」を明らかにしなければならない。その最も重要な仕事は「体験」と対話を深めることである。自らの体験にどれだけ深くコミットし、その価値観や職業観、仕事に対する抱負などがどこから生まれてくるのか、その原点を問い詰める作業が重要となる²⁾。

授業者の役割は、書き手がすすんで自分を見つめるための手立てを条件づけることにある。それまで気づかなかった自分、体験の裏側にひっそりとたたずむ自分の発見に道を拓く仕掛けを施すことである。この作業が、「書きたいこと」の発見をもたらす取り組みとなる。次に、文章化の過程でどのように考え、どのように書けばよいのか、論の展開の道筋を導くことも小論文指導の重要な任務であると考えている。

5 授業の計画

オリエンテーション：小論文のテキスト配布、授業の流れの説明。

1 限目：テキストの講義（職業と生きがい）

2 限目：前半・テキストの講義（職業と生きがい）
後半・「私の体験」（看護との出会いについて経験を振り返り、原稿用紙400字にまとめて提出する。）

3 限目：前半・テキストの講義（小論文の書き方・考え方）
後半・「私のなりたい看護師像」（前時の成果を添削して返却。参考例をプリントして示す。本時の作業は体験を振り返ることから、800字の下書きを書いて提出する。）

4 限目：前半・前時の作品について添削したものを返却、書きふくらませるべきこと、さらに追及すべきことを、受講者の作品のいくつかを例示しながら、受講者全体に解説し、示す。
後半・前の時間に手掛けた小論文を完成し、800字にまとめて、「授業評価」の記入とあわせて提出する。

6 教材 ①拙著『看護師を目指す人のためのすらすら小論文』（105ページ）

②補助資料（A4判）5ページ

■ 授業の展開

1 学習の目的

- ①自分の体験・出会いを振り返り、看護師としての自覚の出発点を詳しく探り、自己像（自己概念）を追求し、その確立を図る。
- ②自分の生活を支える職業について理解を深め、仕事と生きがいについて考える。
- ③看護師としての仕事に求められるやさしさ、使命感、奉仕の心などを見つめる。
- ④自分の思いをわかりやすく伝えることのできる文章表現力を身につける。

2 テキストの内容

- ①仕事と生きがい、職業人の生き方
 - ・仕事と生きがい（日野原重明著『テンドーラブ』ユーリーグ刊）
 - ・自分らしく生きる（神谷美恵子著『生きがいについて』・『こころの旅』みすず書房）
 - ・職人の生き方（志村ふくみ著『一色一生』求龍堂・小関智弘著『職人学』講談社・西岡常一著『木のいのち 木のこころ』草思社）
 以上の著書の一部分をそれぞれ紹介し、内容をとらえる。

〈目標〉

専門職（プロ）の仕事に対する厳しい精進とそこから生まれる生きがいに学ぶ。彼らが、目標に向かうために自らに厳しく、限らない反復練習の中に知識や技術を獲得していく姿を見つめる。その過程で獲得したもの、自信と誇りに満ちて、自らどのように輝いているか、を資料から読み取る。

②論文の文章の特性

- ・説得の文章の書き方を例文に学び、論文が備えるべき条件を理解する。（浅野植英著『論証のレトリック』講談社現代新書、伊丹仁朗著「笑わせ健康法」などの要点紹介）

〈目標〉

コミュニケーションの理論として、説得の文章にはロゴス（論理性）、エトス（信頼性）、パトス（読み手に与える意欲・熱意）の三つの要素が不可欠であることを認識する。特に、論文における主題の提示とその論証の重要性を理解する。

③看護師に対する自覚と認識

- ・「私の、看護との出会い」の振り返りを自らの作業とする。
- ・『私の目指す看護師像』過年度の学生作品を読む。

〈目標〉

幼少時から現在の病院臨地実習に至るまでの体験を振り返り、これまでに出会った現実をこまやかに見つめる。自分がなぜ看護師の道を選んだのか、これから何を目指していこうとしているのか、をとらえる。

④文章表現の知識・技術

・文章点検の実際について、例文の吟味、主題の焦点化、取材の進め方、推敲の視点、句読点の用法、漢字やことばの使い方などの知識・技術を獲得する。

〈目標〉

推敲の実際について、厳しく自己吟味する力を身につける。誤解のない表現を求めて、自分の書いた文章を他者の眼で読み、手直しする態度と技術を身につける。

3 補助資料 (A4判5ページ)

①職業観の理解：安田佳生著『仕事の選び方 人の選び方』他、抜粋による。

②ことばの向こうに見えるもの：金子みすずの詩「たんぽぽとお星さま」を紹介、「見えないものを見る」詩人の「眼力（深層を読む力）」に注目する。自己の体験を読み深めるための視点として。

③小論文準備の手引き：主題の求め方・文章構成の考え方

〔体験と向き合う視点〕

書き手独自の主題を生み出すために、「私」の体験をとらえる手引きとして

- ・私が看護師を志望した動機は、〇〇との出会い（体験）であった。
- ・私が看護師を志望した動機は、〇〇という考え方に基づいている。
- ・看護実習のとき、私は〇〇のベテラン看護師と出会った。
- ・看護実習のとき、私は〇〇の患者と出会った。
- ・看護実習のとき、私は〇〇の場面（状況）に遭遇した。

〔文章構成のモデル〕

論文の条件は〔主題〕とその正当性を示す〔証明〕の二つの要素を満たすことである。〔証明〕の手法としては、〔理由〕または〔事実・体験〕を用いる。

- ・冒頭には、「私の目指す看護師像」、すなわち主題を述べる。
- ・文章構成は次のモデルを参考にしてみよう。

〔主題〕「私の目指す看護師像は、△△の力量をもった看護師になることである」

〔証明〕「私は、〇〇の患者を受け持って、□□の必要性を強く考えさせられた。このことから、私は、当面▽▽の力量をつけることを目指したい」

④教師と看護師：看護師と教師の仕事を比較することによって、職業の違いによる特性を考える。経験の積み重ねによる職能成長について考える。

■ 指導の実際

授業は上記のような「目標、展開、テキストの内容」で実施した。授業における主要な取り組みは、二つの点にある。一つは、個人への指導として添削指導、いま一つは、添削の内容で、全体に指導する必要のある事柄について、全体指導にも反映したことである。

ここでは、後者の、全体指導で取り上げた事例（内容）を述べる。

1 「体験の事実」を見つめる（取材力）

〔例文1〕

「（私の）看護師像を考える上で、母の姿があり、祖父と生活した思い出がある。祖父は末期癌のターミナル期には、医療的処置が行われなかった。不安や苦痛を伴う療養生活であった。生きることへの希望をなくし、日々、傷心を続けていった。急激な体調の悪化を起こすこともしばしばみられた。母は看護師であった。母は小さな異変を見逃すことなく、処置は的確で、しかも早急に行われた。そのため大事に至らなかったことも何度かあった」（女子学生）

〔指導内容〕

この文章によると、看護専門職としての母の、患者に対する判断力や患者への対処の素晴らしさが述べられている。棒線部について、母のその時の、鮮やかな対処があって、初めて祖父は死から救われた。ここで大切なことは、「急激な体調の変化」とは、どんな変化だったのか。また、「小さな異変」とはどんな異変だったのか、これらが述べられていない。「処置は的確で、しかも早急に行われた」とあるが、「私」の目の前で発生した事実、母の取った処置については述べられていない。これだけの抽象的な描写では、読み手に、その場面における母の活躍がイメージできない。観念的で、エトス（信頼される要素）のある文章

とはいえない。

これは、取材不足（あるいは観察不足）の文章ということになる。取材の役割には、次のような意味がある。

①取材は「アリの眼」で、見るべき対象ににじり寄ってつぶさに観察されなければならない。それを丁寧に書くことによって、その場面は読み手の中に確かなイメージを形成する。それが伝達の効果（リアリティー）を生むのである。これが説得力（ロゴスやエトス、さらに、読み手に感動をもたらすパトス）の原点である。

②「私の体験」を描くことは、誰にも真似の出来ない独自性のある文章を生み出すための原則である。この小論文では、誰にも書けない、「私」の体験を駆使して、人には書けない独自の文章を目指さねばならない。

2 人は「体験」によって変わる

看護師になることに魅力は感じていないが、資格は欲しいと考えていた女子学生の文章を取り上げてみたい。この学生は、病院における臨地実習によって大きく変革し、現在は真に看護師の道を目指そうとしている。

〔例文2〕

「…しかし、現在は看護師への道に大きな目的や使命感を持っている。それは次のような体験によっている。

私が特に、実習ですごいと感じたのは、手術を見学したときである。その手術では、看護師だけでなく、医師やMEの方々などたくさんの方が関わり、手術が安全に行われるよう他職種の人が連携していた。機械出しの看護師は、手術に必要な器具を医師に指示されることもなく受け渡ししていた。別の看護師は、モニターをチェックして必要な物品を用意したり、手術中の記録をとっていた。その二人の無駄のない動きを見て、命とかかわる人々の真剣な姿に大きな感動を覚えた。…」(女子学生)

〔指導内容〕

この段落は、「看護師に魅力は感じないが、資格は欲しいという学生」が、緊張感のみなぎった手術の場面を見学して、感動した場面である。何の手術をしているのか明らかにされていないところは、この書き手の観察力の弱さを示している。しかし、ここでは書かれてはいないが、眼を見張っている書き手の姿がうかがわれる。その結果とし

て、見学という「体験」によって考え方は大きく変化した。

①人は体験によって学び、体験によって育つ。これは「学習」の普遍的な原理である。体験に学ぶとは、「心は、必ず、事に触れて来たる」（人の心は何かの事実と接して生じる：吉田兼好『徒然草』157段）と言われているように、私たちは事実と対面して自ら定まる。学習者が事実（課題解決）に主体的に取り組むことの大切さを示唆している。取り組みの努力の結果と向き合い、認識したとき、「学習」は成立する。これは、学習者主体の変容のプロセスと考えることができる。単に与えられる知識を記憶することではなく、体験という坩堝のなかで、自ら取り組み、戦うことで自ら変容することである。このようにして剥落することのない知識や技術の習熟は図られる。体に刻み込まれた「生きる力」³⁾（命を持った看護観）と言ってもよいであろう。

ただし、看護専門職として必要な知識や技術を身につけなければならないこと、その重要性を否定することではない。この場合の知識や技術は、看護を支える「基礎・基本の力」と呼ばれるもので、今後、生涯にわたって獲得し続けなければならない学力である。

②次に重要なことは、その「体験」に感動するやわらかな感性があるか否かである。感性は、出来事を鋭敏にとらえるアンテナの役割を果たす。感動は私たちの自意識の鎧をゆるめ、対象の訴えている意味を深いところで受け入れる触媒となる。大きな感動（驚きや発見のある出会い）は、私たちのかたくなな自意識を一枚ずつはがして、素直な自分に近づけ、やがて大きな自己変革へと導く。芸術や文学に感動することで自らを醇化し、柔軟な感性を育てる営みは看護師にとって欠かせない。特に文学に親しむことは、自己を変革し他者を理解する役割を果たすうえで必須の陶冶材となるのではないだろうか。

小論文を書く力もこの能力や感性に支えられていることを忘れてはならない。

3 論文の備えるべき要素

〔例文3〕

「私は、現在看護に関する勉強をしているが、最終的な目標は、救急救命士になることである。

救急救命士とは、文字どおり、事故や事件などの災害の現場に赴き、救助活動をしながら、人命

を救う職業である。救助活動としては、主に医師の指示に従いながら、被害者や患者の状態に合わせた処置を行っていくことである。それにより、病院などの医療機関と連携し、人命を救う確率が増加している。

医療技術が急速に発達している現代社会において、救助活動をさらに効率よくするための工夫が施された。その一つがAEDである。

AEDとは、簡単にいえば、……。」(男子学生)
〔指導内容〕

これは、救急救命士を目指す男子学生の描く将来像である。この作品には、学ばなければならない大きな課題がある。

①職業としてのアイデンティティーを書くのであれば、自分の生き方と職業との整合性を述べなければならない。論文とは、説得の文章であるから、読み手に、主題の正当性を「なるほど」と合点させる力が求められる。その条件として次の点を考慮したい。

ア あなたは、なぜこの仕事をしたいのか。仕事の現場をどうとらえているのか。

イ その仕事には、どんな能力(技術、知識を含めて)が必要と考えているのか。

ウ この仕事に携わる人材として、自分にどんな資質があると考えているのか。

エ この仕事に対する、あなたの使命感や決意にはどのようなものがあるのか。

小論文の生命線は、「私だけが知っていること(私の事実・私の体験・私の意見)を、誰にもわかるように述べること」である。「私」の価値観や生き方から遊離した知識や論理は、いま、この小論文の目指しているところではない。

②上記の条件(ア～エ)を究明することは、書き手が生活を振り返り(自分を知り)、職業の特性に切り込む(職業を知る)ことである。例文には、この点が欠落している。

ここで求められることは救急救命士の働く現場から、生の情報を得ることである。その仕事に惹かれる根拠を探らなければならない。また、自己の看護観や抱負についても取り上げる必要がある。この二つの要素は、小論文を建築するための材料となる。土台、柱、屋根などのしっかりとした素材がないところで、家を建てることはできない。期待する家のスケッチを見せられても、そこに論理的な説得力(ロゴス)や、人を納得させる信頼(エトス)は生まれえない。事実に基づいた根

拠のある主題と証明(理由・体験・事実など)の二つの要素が備わって、初めて読み手を説得することができる。

③さらにこの学生に求めたいことは、「事実」を厳密に捉え、読みこんでいく力の獲得である。「事実」をとらえる力は、課題の把握力(問題発見力)を支える。ここから小論文への取り組みが始まるのである。課題をとらえる力、課題と取り組む意欲とエネルギー、課題解決のための手段や方法、論理的な思考力、これらが統合されて、深められるとき望ましい小論文作成の条件は整う。これが課題解決(生き方探究)へのダイナミズムである。

小論文で発揮されなければならない力は、手堅い手法で課題に挑む「生きる力」と言い換えることができる。いま、大学で求められている学力として、この力の育成は急務であろう。職場は、この力をもった生きの良い人材を求めている。急速に変化する混迷の社会に求められているものは、詰め込まれた知識で頭をいっぱいにした、従順なサラリーマンではなく、課題に取り組むしなやかで強靱な個性のある人材である。

大学における小論文の授業も、この「生きる力」の育成を重視しなければならないと考える。

4 誠実な論文を書く態度

〔指導内容〕

ア 文字はていねいに書かれているか。特に、ひらがな、カタカナに書き癖はないか。適切な表記で、「読んでいただく」配慮がなされているか。

イ 漢字の使用は適切であるか。常用漢字は適切に使用されているか。

ウ 一文の長さ、段落の取り方、論の展開、原稿用紙の書き方は適切であるか。

などについて、細かな取り組みを行った。心をこめたていねいな文字は、その人の品性をものがたる。ものごとに取り組む真面目な態度、処理の明快さ、考え方の明晰ささえうかがわせる。逆に、乱雑な文字はその人の仕事ぶりや態度にマイナスのイメージを伝える。書いたものから、ルーズさ、乱暴さ、いい加減さ、あいまいさなどがうかがえると、緊張感を欠いた、だらしない人柄がそのまま印象として伝わる。誤字が多ければ、知識の浅いことを読み取られる。小論文は、面接と一体のものとして受け止められ、書き手の総体が評価さ

れることを意識しなければならない。

■ 授業の結果

講義と添削指導を通じて実施した結果の成績は、次に示すとおりである。受講者数92名。臨地実習、その他の関係で受講を途中でやめたものを除いている。

評価の観点

- ①自分の体験が詳しくとらえられているか。
- ②職業と自分の生き方へのかかわり、自覚などが書かれているか。
- ③自分独自の目標、あるいは課題がとらえられているか。
- ④文章表現として、主題と構成、文表現、書写などは適切であるか。

などを中心に、評価した。

全体の成績の結果は次の通りである。

Sは、体験を踏まえて内容の掘り下げが深く、文章としてよくまとまっており、思考の流れが柔軟に展開している作品。

Aは、体験を踏まえて内容の掘り下げが深く、文章としてまとまっていて、説得力のある作品。

Bは、文章としてはまとまっているが、体験や内容の掘り下げがやや弱い作品となっているもの。表現に難点のある作品。

Cは、体験の掘り下げが不十分で文章構成が未熟なもの。文章表現の知識・技術に難点がある作品。

全体に誤字や文字の乱雑さにおいて、多いもの、顕著なものは減点の対象となっている。

表1 作品の成績

成績	人数
S	8
A	53
B	20
C	11

〔作品例 ①〕 評価Sに該当する作品

看護の基本は観察である。私は、誰よりもすぐれた観察ができる力を磨いて、患者に合った看護のできる看護師になりたい。

私は成人看護学実習で、意識障害のある患者を受け持った。会話をすることは不可能で、表情の

変化もあまり見るができなかった。そのため、患者にとって良い看護ができていたのだろうか、ととまどいを感じていた。患者からことばとしての反応が返ってこないだけに、患者に負担をかけているのではないか、負担の少ない効果的なケアができていないのか、わからないでいた。

しかし、病棟の看護師の対応には、患者が訴えられない分だけ、患者が一生懸命に訴えようとしていることの意味を理解したり、患者の変化に気付けるよう、日々のかかわりを大切にす姿勢があった。このことから、私は観察の重要性を学んだ。

看護師が実際に、痰の吸引を行う際、まず痰がどの部分に貯留しているのか聴取していた。痰が取り出しやすいようにタッピングを行っていた。さらに、呼吸が維持できるように、一回の吸引時間を短くし、酸素を与えながら行っていた。「タッピングを行うと、効果的な処置ができるんですか」と質問したところ、「状態が変化しやすい患者でも、一つ一つの処置は、その患者にとって必要な処置なんです。だから、看護師として、患者の状態に合わせた負担の少なく、効果的な処置を行う必要がある。そのためには、まず、患者の状態を把握する観察が大切なよ」と教えていただいた。

この経験から、看護を行う上で、観察が重要な役割を果たすことを学んだ。また、観察を行うだけでなく、患者にとっての安全、安心といったことを見据えておかなければならない。これが患者にとってよりよいケアへとつなげていくやり方であることを学んだ。私は、観察力が未熟である。今後、看護における観察力を養っていくことが、私の当面する課題である。(女子学生)

* (評) こまやかな観察とそこから学ぼうとする姿、今後の課題が述べられている。

〔作品例 ②〕 評価Sに該当する作品

私は、患者の身体だけではなく心も看ることのできる看護師になりたい。

実習で、私は閉塞性動脈硬化症・慢性関節リウマチ・糖尿病を発症されている患者を受け持った。患者は、長期化する入院や足趾切断の可能性、日々変化する自分の外見などから、「もうダメかもしれないと思う時がある」と、自分の将来を悲観していた。しかし、患者は自分の家族や友人たちの前では、退院後の生活のことを楽しみだと笑顔で話していた。私は、このことを通して、患者

が病院という特殊な環境の中で、医療者だけでなく家族や友人にも心配させないようにと気遣う姿を見た。そして、患者の身体だけでなく心も看ることのできる看護師になりたいと思った。

私は、看護師として患者の心も見ていくために患者の心をわかりたい・わかろうとする努力を大切にしたいと思う。限られた時間の中でも何気ないかかわりを通じて、患者の表情や声のトーン、話し方などを観察する。そして、可能な限り患者の話に耳を傾け、その気持ちを受け止めていく。そうすることで、患者が自分の気持ちを少しでも表出でき、心の痛みや苦しさを軽減できるようにしたい。そのために私は、看護師として患者が安心して、自分の身体を預けることができ、この人なら自分の気持ちを話せるという安心感を与えられる力量を身につけなければならない。

このような力量を身につけるためには、当面の目標として、基本的な看護知識・技術を確実に自分のものとするところである。具体的には一つひとつの看護技術について根柢を持って説明でき、実施できる力を身につけることである。そのためには、少しずつでも技術練習に励み、それをテキストによってきちんと復習することである。このような学習方法を実施していきたいと思う。そうすることで、患者から信頼され、患者の身体だけでなく心を看ることのできる看護師を目指していきたい。(女子学生)

* (評) 患者の言葉に深い意味を読み、そこから自己の課題と目標をとらえている。

■ 学生による授業評価

学生による授業後の評価は、A4判1ページ、質問項目の回答は自由記述とした。内容は、「学習者の自己評価」・「テキストの評価」・「授業の評価」に関するものである。「評価表」の記入は、最終授業日の4時間目に作文完成の後となった。作文に使用する時間が足りなくて、「評価表」の記述には具体的な回答を求めたが、「はい」だけとなった学生が意外に多かった。また、内容を丁寧に書けていない学生もあった。記入のための時間不足であった。そうした中で、書く時間のあった学生は具体的に記述している。それぞれの質問項目と記述の内容は、次にまとめている通りである。

「 」で示されている表記は学生の言葉を引用し

たもの。その末尾の()内の数字は回答者の人数を示している。共通する内容と判断される内容のものは、代表的な記述に繰り返し入れてまとめている。

なお、自由記述のため、一つの質問項目に複数の回答を書いた者もいるので、集計の数が回答者の人数を上回るものもある。

◇学習者の自己評価

1 授業にしっかりと取り組むことができましたか。(回答数96)

- ①はい (32) + ②集中して取り組んだ (30)
- ③自分を見つめて取り組むことができた (9)
- ④自分の目指す看護師像が見えてきた (7)
- ⑤その他 (9)
- ⑥しっかりと取り組むことができなかった (9)

〔考察〕授業への参加態度

「授業にしっかりと取り組んだ」とみられる人が①～⑤で87名。この中には、「ぐったりするほど考えた」や「目指す看護師像に迷いが出た」などの記述もみられた。⑥「しっかりと取り組むことができなかった」人は9名である。この内容は、「作文が苦手で、意欲的になれなかった」「難しかった」「実習などがあって、時間が足りなかった」などである。

2 書く時間を十分に取ることができましたか。(回答数79)

- ①はい (17) + ②十分とれた (14)
- ③ぎりぎりだった (13)
- ④その他 (5)
- ⑤時間が足りなかった (43)

*「自宅で時間の確保をした」(22)この人たちは、「時間が十分とれた人」と「足りないの自宅で補充した」の二つの意見を含んでいるので、総数にカウントしていない。

〔考察〕時間の確保

学習時間の確保については、厳しい反応が出た。「自宅学習」に持ち込んだ人については、やむをえないと考え、それを期待してもいた。しかし、⑤の「時間が足りなかった」(43)については、課題が残った。授業中に作品を完成させたいという希望である。私としては、テキストの解説、全体指導の時間が取りにくく、忙しかった。実習を行っている学生にとっては、多忙の上に宿泊を伴う場合もあるので、自宅学習は期待できない。

3 小論文を書くことで、発見することはありましたか。(回答数94)

- ①はい (6)
- ②看護観について考えが深まった (54)
- ③文の書き方について学んだ (25)
- ④その他 (9)

〔考察〕書くことによる発見

この設問への反応は極めて多彩であった。②の内容では、「新たな自分探しができた」、「書く途中で場面を考え、予想以上に体験を思い出すことができた」などが見られ、書く行為を通じて、無意識に過ごしていた体験を改めて見直している。

「自分の足りないところ、難しいところが再確認できた」「実習を振り返って、看護の喜びを改めて知った」「自分の考えに気づくことができた」「看護に興味がないと思っていたが、そうでないことがわかった」「自分の看護師像はまだあいまいなものだ。もっと考えないといけない」「自分の考えがたくさんあることを知った」などには、この作業を通じて自分と対話し、これまで見えなかった部分について発見した成果が見える。

③の内容で多かったのは、「文章を書く知識・技術がわかった」(11名)である。作文の授業であるから当然ではあるが、書くことへの認識が深まった。「文字の使い分けについて、あらためて学んだ」「論文における証明の大切さを知った」「文字が汚いこと、漢字の勉強が大切なことに気づいた」「小論文の考え方、書き方が理解でき、少し自信がついた」などが見られる。

4 小論文を書くことに自信が持てましたか。(回答数83)

- ①はい (12) + ②以前より自信が持てるようになった (40)
- ③まだ自信が持てない (25)
- ④その他 (6)

〔考察〕自信・意欲の獲得

②の内容として、「赤ペン(添削)によってポイントがわかった」「書くことの苦手意識が克服できそうだ」「練習を重ねることで、少しずつ具体的に書けるようになった」「自分の考えが、一回ずつ深まって自信がついた」などが見られる。回を重ねて書く作業を続けることで、自分の内部に起きている変化を読み取っている。「書くことが好きになり、自信がついた」という所感は、本人の大きな財産となるであろう。

しかし、「まだ自信が持てない」(25名)の課題

が残った。

5 看護師としての自覚が見えてきましたか。(回答数77)

- ①はい (7) + ②目標、自覚、課題意識が見えてきた (48)
- ③看護師になることへの意欲がわいた (16)
- ④その他 (6)

〔考察〕自覚・意欲の把握

②について、「ぼんやりしていたが、やりたいことが見えてきた」「小論文を書くことで、実習などのできごとを振り返ることができ、目標を見つけることができた」などの反応が多くあった。平素の学習を振り返って見つめる機会の大切なことをうかがわせる。「自分のことをまとめたり、他人の意見を聞くことで、自覚しなければいけないと思うことが多くあった」「これまで、大きなものしか見えなかったが、具体的なものが見えてきた」など、認識の仕方の変化を見せる者もあった。授業での格闘の成果であろう。

一方、「看護師の仕事が自分にとって何なのか、よくわからなくなった。もう一度考えなければならない」という反応もある。原点に立ち返り、さらに手堅い看護師像の確立に向かおうとしている姿を思わせる。

③について、「自分の目指す看護師像が見えてきたことで、自覚や意欲がわいた」「小論文を書いていくうちに、看護師として何が必要で、どこが不足しているかがわかり、いっそう意欲がわいた」「自覚が低かったことがわかり、看護師としてどうあるべきか、考えさせられた。そのことで自覚が深まった」「振り返ってみて迷うこともあるが、改めて意欲がわき、どういうことをすればよいのかを考えた」などを見ると、自ら切り開いて進む姿がうかがわれ、自立していく様子が読み取れるようである。

④「その他」について、「看護師としての自覚が持っていないことがわかった」「看護師として、こんなことでいいのかと考えるようになった」「実習を振り返ってみて、まだ自分の考えがゆらいでいるように思う」などが見られる。一段高いレベルから、自分を改めて評価し、課題をとらえている。

6 自分がこれから取り組む課題が明らかになりましたか。(回答数67)

- ①はい (2) + ②体験を振り返って課題が見えてきた (31)

③文章表現力の必要性、書く力の必要なことがわかった (27)

④これまでの経験をもう一度振り返る必要がある (7)

[考察] 課題の把握

②について、「基本をしっかり身につけること」「観察をしっかりしなくてはいけない」「目指すものが見えたため、自分に足りないところが見えてきた」などがある。自分を知れば知るほど課題も姿を変えてみえてくるという様子がよめる。

そのほかに、「もう少し細かいところを勉強しなくてはならない」「実習であっても、看護師の卵として自覚し、現実を見なくてはならない」などには、自分の実力や立場の自覚がうかがえる。「国家試験に合格することだけで満足してはいけない」という、新たな認識を示す声もあった。

◇テキストの評価

7 テキストはよく読みましたか。(回答数90)

①はい (20)

②一部読んだ (39) + ③授業中の説明のとき、その部分を読んだ (17)

④よく読み、参考にした (7)

⑤その他 (7)

[考察] テキストの活用 (1)

②, ③について、いずれもテキストの一部を利用しただけの状況がわかる。④については、「傍線を引きながら、自分で要点をまとめた」などがあり、⑤では、「実習が終わったら、読むつもり」などが見られた。全体的には、時間が限られており、テキストを十分に活用することはできていない状況がわかる。

8 テキストは小論文の学習に役立ちましたか。(回答数90)

①小論文の知識・技術を学んだ (73)

②職業人の生き方などが参考になった (12)

③その他 (5)

[考察] テキストの活用 (2)

①について、「書き方、具体例、実例が役立った」(25)、「小論文の書き方・考え方がわかった」(20)。「使わない漢字、文字の正しい使い方、これらについて知らないと恥ずかしいことであった」など表記について11名が受け止めていた。

②に関しては、「いろいろな職人の生き方を読んで、がんばろうという勇気もらった」

「テキストの引用文献について、このような資料をもっと読んでみたい」などがあった。細かい感

想としては、「世阿弥の『離見の見』という言葉が印象に残った」「『職人の華』の話や、職業にはそれぞれ経験年数による仕事の分担があり、最初からすべてのことに完璧である必要はないといわれたことが印象に残った」「自分の過去も含めて、仕事に生きがいを持てるかどうか、自分に向き合うことの大切さを考えた」などが見られた。このなかには、授業で話したことも含まれている。

9 テキストで、もっと詳しい説明のほしいところはありましたか。(回答数62)

①特に注文するところはない (48)

②すぐれた例文、職業人の資料を読みたい (9)

③その他 (5)

[考察] テキストへの注文

②について、「よい例文をもっと読んでみたい」「どこをどのように直せばいいのか、詳しく書いてほしい」「文章の構成要素について、詳しくしてほしい」などが見られた。③では、「説明は詳しくてわかりやすかった」というものもあった。

◇授業の評価

10 授業はわかりやすかったですか。(回答数81)

①はい (4) + ②小論文をどのように書いたらよいか、わかった (61)

③補助資料が役に立った (11)

④その他 (5)

[考察] 授業の評価 (1)

②について、「説明がゆっくりでよかった」「声が大きくてわかりやすかった」「事例があったので、理解しやすかった」「説明が詳しく、ていねいであった。間違いのところは、徹底して説明があった」「ボードの利用があったのでよかった」「添削してもらったので、どのように書いたらよいかわかった」「どうしてそのようにするのか、根拠が示されたのでよかった」など、授業の基本的な技術や手法についての感想が出た。

③については、「詩や体験、具体例などが紹介されてよかった」「教師と看護師の仕事の比較がとても参考になった」

④では、「説明はわかりやすかったが、求められるものが高くて、むずかしかった。しかし、いい勉強になった」「授業が面白かった」などである。

11 授業で改善してほしいところがありましたか。(回答数77)

①論文を書く時間がもっとほしい (37)

②特にない (33)

③その他 (7)

〔考察〕授業の評価 (2)

①について、「小論文を書く時間をもっとほしい。急ぐのできれいに書けないし、途中で終わることが多くあった」という表現が代表している。実習が重なっている学生や多くの内容を一気に済ませようとする私のあせりもあった、厳しい要求をしたことが反省される。

12 その他の気づき。(回答数26)

①実習と重なったことが残念だった。(11)

②4年生になってすぐだったので、時期としてはよかった。(3)

③文章の書き方、考え方を勉強できてよかった。(2)

④その他 (10)

〔考察〕全体への気づき

④において、「小論文をていねいに直してもらって、自分の間違いに気づくことができたし、やる気も出てきた」「看護師を選択する上で、自分自身どうなりたいか、これからの生きがいについて、まだまだ考えなければならない課題が見つかった」などがあった。「実施時期はよかったと思うが、授業時間数が少なく、もう少し繰り返し練習したかった」という記述が印象に残った。学習内容に比して授業時間数があまりにも少ないという実感は、私にとっても同じ思いである。

■ 成果と課題

①授業の成果として、過年度までと異なったものを得ることができた。それは、学生の自己に対する厳しい探究とこれまで気づけなかった「隠れていた自己」の発見である。「書く」という目的を達するために、意識して自分を具体的に掘り下げた結果であろう。受講者の自己評価の中に次のような表現を見ることができる。

- ・「新たな自分探しができた」
- ・「実習を振り返って、看護の喜びを改めて知った」
- ・「看護について興味がないと思っていたが、そうでないことがわかった」
- ・「看護師像がぼんやりとしていたが、やりたいことが見えてきた」
- ・「看護師として、というよりは一人の人間として、こうありたいという像が見えてきた」
- ・「学びについて、初心に帰った」

これらは、自分のものの見方・考え方に対する

大きな変革を含んでいる。新しい自分を発見した喜びの声と言えるかもしれない。

・「書くことが好きになり、自信がついた」

・「小論文の授業が楽しかった」

などの評価もあった。書くことの手法を学び、思いを整理することができた。その結果、自分の考えが素直に表現できた喜びの声と受け止めた。

②小論文の学習を通じて、学生は自己と対面し、厳しく体験を吟味する。文献に見る先人の論理や職業人と出会う。二つの出会いを通じて「職業観」「生きがい」「自分の生涯」などについて、心の扉を開いていく。そのとき彼らは作品や自他の体験と切り結び、思索の世界に踏み入る。医療に従事する人々、患者、職業人としての将来を見つめながら、自分の願いを組み立てるのである。体験を濾過しながら行われるこの作業を通じて、学生は自分を確定していく。思考を深め、自己像を確立するこのプロセスは、看護師像の形成にとってきわめて重要な学習活動といえるであろう。剥落することのない学力(看護観)は、モノと取り組むことによってはじめて自分のものとなる。

③残念ながら、「書くことにまだ自信が持てない」(25)とした学生には、手厚い取り組みがなされなくてはならない。書くことを積み重ねることも一つの方法であろう。また、臨地実習などで時間が取れず、一貫した授業の受けられなかった人々の課題も残った。

これらのことは、今後、学部の先生方に託さざるを得ない。

④看護学部の学生が4年間の在学中に受ける授業数は、膨大な時間数に上っている。何千時間という授業の、その隙間に仕組まれた、わずか4コマ半の小論文の学習は、きわめて些細な時間である。職業観を見つめ、自己像の確認をする時間としてはあまりに少ない。しかし、予想以上に多くの学生の「自己との対話」は進んだように思える。彼らの求める力も強かった。時宜を得た出会いの大きさもあった。このことを喜びとしたい。

⑤看護の専門性について白紙の私が、看護師の道を指導することはできない。しかし、学生は自らを見つめるという手法によって、明らかに変容している。かねてより私は「読むことは根を育て、書くことは実を育てる」という言葉を大切に考えてきた。「書く」ために私たちは、自分を「読む」。相手を「読む」。生活を「読む」。この営みが私た

ちの生きる「根」を形成すると考える。根は人の見えない地中であって樹木を支え、命を支えている。この根に支えられながら私たちは、考えをまとめたり適切な表現を求めて模索する。その結果、ゆらぐことのない言葉と出会う。その言葉を「書く」ことによって、混沌とした思念は明快な認識に昇華される。このとき私たちは、新しい自己との出会いを果たす。これが、小論文の学習における人間形成のプロセスであると考えている。

小論文を書くことで、学生たちは命をもった「実」=ゆるぎない学力（看護観）に触れ、実感し、看護の核心に一步近づいたのではないか。彼らの深いところで、大きな岩が動いたような手ごたえを、私は感じる。限られた時間であるにもかかわらず、厳しい要求であったにも関わらず、真摯な声をもって応えてくれた学生諸君に敬意と感謝を伝えたい。

2008.09.21記

参考資料

この授業を実践し、報告をまとめるにあたって、大きな示唆をいただいた論考の主なものに次の資料がある。記して謝意を表します。

1) V. E フランクル著『夜と霧』ドイツ収容所の体験記録：霜山徳爾訳1985.5 みすず書房

「個々の人間を特徴づけ個々の存在に意味を与える唯一性や独自性は創造的な仕事に対してあてはまるばかりでなく、また他の人間とその愛に対しても当てはまるのである。この各個人が持っている、他人によってとりかえられ得ないという性質、かけがえのないということは——意識されれば——人間が彼の生活や生き続けることにおいて担っている責任の大きさを明らかにすることである」pp.186～187

ここにいう「意味」や「責任」は、現代医学でその重要性が指摘されている「実存性＝人間らしさ（人間の生きる意味）」と解釈することができる。私たちが、自分らしく生きるためには、すなわち、私の目指す看護師像を形成するためには、この「意味」や「責任」が「私」にとって何であるかを究明しなければならない。

2) N. フライ著『大いなる体系－聖書と文学－』伊藤誓訳：法政大学出版局 1995.11

「教師とは元来、知識のない人を教授する人ではない。むしろ、学生が精神内部にテーマを再創造しようとする人のことである。そのための教師の戦略は、まず第一に学生がすでに潜在的に知っていることを学生自身に認識させることである」（序論 X iii）

「潜在的に知っていること」とは、「はっきりと言葉にできていないけれども知っていること」と読むことができる。自分の中で「かげろうのようにゆらいでいる思い」を言葉に置き換えることによって顕在化させることと解釈することができる。N. フライはこのことを「再創造」と言っている。

3) 梶田叡一著『〈生きる力〉の人間教育を』金子書房 2002.2

「真の『自ら学ぶ力』は、『自分自身にとっての〈現実〉に根差し、自分自身にとっての〈真実〉を求め続ける力』である」（p.32）としている。さらに、「『自ら学ぶ力』は『生きる力』であり、それは、『自分が自分自身の主人公として、自分の責任で自分を発展させていくことを可能にする力』であるとしている。